様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２１ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０５３４

研究課題名（和文）日英語の指示表現と名詞節化形式の選択・出没の普遍性と個別性に関する総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study on the Mechanism which Controls the Selection and Omission of Referential Expressions and Nominalizing Forms in English and Japanese

研究代表者
大竹　芳夫（OTAKE, YOSHIO）

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：６０２７２１２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は，日英語の指示表現と名詞節化形式の選択・出没という言語事象を通して両言語の普遍性と個別性を原理的に解明した。具体的には，従来は個別的に論ぜられてきたIt is that節構文とIt turns out that節構文の意味特性，発話条件，談話機能を統一的視座で比較対照することで，聞き手には容易には知りがたい情報が言語化され，談話に切り出されるメカニズムを明らかにした。また，X位置に指示表現を伴い、抵抗感があることを断り告げるI hate to say X構文を取り上げ，その意味と機能を実証的に説明した。本研究成果は学術論文，図書等にとりまとめて社会・国民に迅速かつ広範に還元できた。

研究成果の概要（英文）：　English and Japanese have been compared and contrasted, and some interesting characteristics have been revealed. In this research, we have made a comprehensive exploration of the mechanism which controls the selection and omission of English and Japanese linguistic forms such as the referential expression "it" in English, the "that"-clause, and the nominalizing form "no" in Japanese. First, we have provided a unified account for similarities and differences between the It is that-clause construction with the It turns out that-clause construction, paying close attention to information processing by referential expressions. We have also pointed to some of the hitherto neglected semantic and pragmatic aspects of the I hate to say X construction. We have extensively discussed that the referential expression "it" or "this" shown in the X of the I hate to say X construction is selected to convey information that has previously been established but unknown to the hearer.

研究分野：英語学

キーワード：日英語比較研究　指示表現　名詞節化形式　実情や結末の判明を伝える構文　接続表現　It is that節構文　It turns out that節構文　I hate to say it構文

１．研究開始当初の背景

言語理論の発展に伴い，日英語の多様な言語現象が比較対照され興味深い特性が明らかにされてきた。本研究では，最近の言語理論研究の成果を活用し，日英語の指示表現と名詞節化形式の選択・出没という言語事象を通して，両言語の普遍性と個別性を原理的に解明する。

英語の that 節及び小節も日本語の「の/こと/もの/わけ」節も，補文内容を名詞節化する共通の機能を有する。また，両言語には話題中の情報の特性を聞き手に合図するさまざまな指示表現が存在する。しかしながら，実際の談話を観察すると，英語と日本語の指示表現と名詞節化形式の選択と出没には明確な相違が認められる。本研究は研究代表者によるこれまでの一連の研究成果で見出された基本的知見と着想を深化，発展させるものである。文部科学省科学研究費補助金平成 11-12 年度奨励研究(A)及び平成 14-16 年度若手研究(B), 日本学術振興会科学研究費補助金平成 18-20 年度及び 21-23 年度基盤研究(C)の助成を受けて，本研究の対象となる名詞節化形式を含む諸構文のうち，英語の It is that 節構文や take it that 節構文，日本語の「{の/こと}（だ）」構文に関する基本的データの収集は既に始まっており，その実証的研究の成果の一部は大竹(1994)(「It is that 構文に関する意味論的，語用論的考察」『英語語法文法研究』(英語語法文法学会学会誌)創刊号), 大竹(1995)(「解釈と換言：It is that 節構文と That is 構文の意味と機能について」『言語文化論集』(筑波大学現代語・現代文化学系)第 40 号), 大竹(2001) (「時間と空間認知に基づく接続表現：now that / in that 節と「ので」節の意味と機能」『意味と形のインターフェース』下巻，くろしお出版.)，大竹(2004)(「S+take+it+that 節構文の意味と談話機能」『英語語法文法研究』(英語語法文法学会学会誌)第 11 号), 大竹(2007)(「日英語の名詞節化構文の意味と機能：{It is that/ S take it that}節構文と「のだ」構文」『英語と文法と』 開拓社.)等で発表している。モダリティと名詞節化形式の共起制限や，日本語の疑問詞「なぜ/どうして」は名詞節化形式「の」が義務的であるが対応する{Why / How} is it that 疑問文の使用にはより厳しい意味的・機能的制約が課される点等も大竹(1998)(「Why is it / How is it 疑問文の意味と機能に関する実証的考察」『英語語法文法研究』(英語語法文法学会学会誌)第 5 号)で論じ，萌芽的研究は進みつつある。また，日英語の名詞節化形式の諸相に関しては Otake (2002) (“Semantics and Functions of the *It is that*-Construction and the Japanese *No da*-Construction.” In T. Ionin, H. Ko, and A. Nevins (eds.). *MIT Working Papers in Linguistics*. Vol. 43. Dep. of Linguistics and Philosophy, MIT, Cambridge, Mass. マサチューセッツ工科大学.)等で国内外に向けて積極的に発表している。さらに, 大竹(2008)(博士（応用言語学）学位論文「「の（だ）」に対応する英語の構文」)で体系的・包括的にまとめあげ，2009 年には科学研究費補助金（研究成果公開促進費（学術図書））助成により『「の（だ）」に対応する英語の構文』(単著，くろしお出版, 2011 年 3 月に増刷.)を刊行し，得られた知見を社会・国民に還元している。

本研究では，これらの萌芽的研究で見出された基本的方向性と着想を，最新の言語理論と照合しながら発展させ，総合的視点から研究成果を積極的に発表する。

２．研究の目的

本研究目的は，日英語の指示表現と名詞節化形式の選択・出没という言語事象を通して，両言語の普遍性と個別性を原理的に解明することである。本研究期間内で主に次の３点を多角的に研究してゆく。

(1) 指示表現と名詞節化形式を伴う諸構文を統語的振る舞いの相違に基づいて分類し，それぞれの統語的事実を表面的な形式の背後にある抽象的な統語構造と関連付けて説明する。
(2) 各指示表現や名詞節化形式により言語形式化される伝達内容はどのような情報であるのかを機能的，語用論的観点から明らかにする。
(3) 英語と日本語の指示表現と名詞節化形式の選択・出没を比較対照しながら，日英語の知覚認識メカニズムと文法化過程の個別的側面と普遍的側面の実証的解明を試みる。

３．研究の方法

次の研究方法に沿って本研究対象となる言語現象に対して研究成果を取りまとめる。

(1) 本研究課題に関連する従来の研究を，批判的に検証する。日本語の「の/こと/もの/わけ」を含む名詞節化形式及び対応する英語の名詞節化形式を統一的な視点から分析し，体系的に記述するために，基本的な文法概念を提出する。
(2) 実証的な研究を目指し，研究対象となる日英語の構文が用いられている基礎的資料を収集，観察，分析する。
(3) 最新の言語学研究の動向を分析し，意味論・語用論研究で扱われる基本的概念や問題点を整理しながら，指示表現の選択と名詞節化現象を理論的枠組みの中で分析する基礎を構築する。
(4) 実際の談話を観察すると，英語と日本語の名詞節補文の選択と出没には明確な相違が認められる。こうした補文標識の選択

の相違は，英語と日本語とでは補文に表されるような事象に対する認知的基盤が異なる可能性を示唆する。日英語の名詞節化形式が示す統語的・意味的特性の異同を考察するために，どのような発話場面や状況によりそれぞれの補文が選択されるかを明らかにしながら最近の言語理論との関連性を検証しつつ，話し手の認識と知覚に関わるメカニズムと文法化過程を説明する理論的仮説を立てる。

(5) 当該仮説に一見反すると思われる諸例について，日英語母語話者をインフォーマントとして活用しながら分析を行い，総合的視座から日英語の指示表現選択と名詞節化形式の生起に関わる制約を明らかにする。

(6) 東西の諸言語を対象とする従来の個別研究の成果を批判的に検証し，日本語のように名詞節化詞「の/こと/もの/わけ」等を発達させてきた主題表示が随意的な言語と，英語のように主題表示が義務的で補文形式のみならず it の指示特性を活用しながら既定性を積極的に合図する言語等，言語間の既定性の保証過程の異同を統一的視座で解明する。

(7) 本研究で得られた言語学的知見が英語教育，日本語教育でどのような教育的意義をもつのかについてもとりまとめて発表し，示唆と提言を行う。

(8) 研究成果の記述的・理論的意義を体系化し，社会・国民に迅速かつ広範に還元する。

４．研究成果

研究初年度の平成 24 年度は，実証的研究を目指し，研究対象の日英語構文に関する基礎的資料を収集，観察，分析した。また，基本的文法概念や問題点を整理しながら，本研究課題の名詞節化現象を理論的枠組みの中で分析する基礎を構築し，言語学の研究成果を英語教育に活用する方策についても検討を進めた。初年度の成果実績として，大竹(2013a)（「S+turn+out(+to+be+that)節構文の主語要素の選択と出没に関する意味論的研究」『言語の普遍性と個別性』 第 4 号，pp.1-25.）を挙げることができる。(ia-b)のような S+turn+out(+to+be+that)節構文は談話で頻用されているにもかかわらず十分にその意味特性は解明されてはいない。

(i) a. Some days I just look at our teenagers and think they must have dropped off an alien planet. It's not that they have three eyes or green skin; it's that they do the strangest things for seemingly no reason. <u>It turns out there *is* a reason!</u>
（E. D. Hill, *I'm Not Your Friend, I'm Your Parent*）

b. ［記事冒頭の 1 文］<u>It turns out that those fares to London on British Airways were too good to be true. And now the airlines is paying the price.</u>
（*Los Angeles Times*, 2012/10/1）

大竹(2013a)は，本構文の主語要素の出没と選択に関して意味論的視点から次の点を実証的に明らかにした。

⑴ S+turn+out(+to+be+that)節構文の基本的意味は，先行文脈や話題中のことがらの実情，真相，事実，帰結，結末といった聞き手には容易には知りがたい情報が調査や研究などの経緯を経て明らかになることを表現することである。

⑵ S+turn+out(+to+be+that)節構文の主語要素には it のみならず，真相や結末を表す語彙名詞句，関係代名詞 which，指示代名詞 that も生ずる。さらには主語要素が表出されない現象が広く確認できる。

⑶ S+turn+out(+to+be+that)節構文の主節要素“S + turn + out”部が格下げを受けて文頭，文中，文末に独立して生起し，真相や結末の「判明」の伝達を合図する談話標識として機能する用法が観察される。

⑷ S+turn+out(+to+be+that)節構文の主語要素 S の省略現象について意味論的視点から検証し，実情や結末を伝える表現や談話標識が S + turn + out (+ to + be + that)節構文を導くなどして，先行文脈や話題中のことがらとのつながりが保証されるような場合には，先行情報を指し示す主語要素 S の存在理由が意味的に希薄になり，結果的に主語要素 S が表面に現れない現象が生ずる。

⑸ S+turn+out(+to+be+that)節構文は聞き手には容易には知りがたい情報の判明を伝達することから，教示的な印象や知識の優越といった含意を避けるなどの何らかの語用論的な理由により S+turn+out(+to+be+ that)節構文の主語要素が意図的に表出されないといった背後のメカニズムも考えられる。

初年度の研究成果は当初の目標を概ね達成することができた。

平成 25 年度は，研究初年度の研究成果を踏まえながら，日英語の指示表現と名詞節化形式の選択や出没がどのように理論的枠組みに位置づけられるかについて検討した。また，談話や発話場面を分析し，指示表現の選択が語用論的要請によって動機づけられている諸現象を検証した。具体的には，英語の指示表現を伴う I turns out that 節構文，That is 構文，I hate to say it 構文を中心に分析した。平成 25 年度の研究成果として大竹(2013b)（「主節部に単純現在形が現れる It turns out that 節構文に関する記述的研究」『新潟大学言語文化研究』 第 18 号，pp.13-26.），大竹(2014a)（「指示表現と換言：

That is 構文がつなぐ情報」『新潟大学経済論集』第 96 号, pp.171-183.), 大竹(2014b)(「文をつなぐ指示表現の出没と選択に関する意味論的・語用論的研究：I hate to say X 構文が指示表現 X でつなぐもの」『言語の普遍性と個別性』 第 5 号, pp.15-32.) を挙げることができる。

まず，大竹(2013b)では，大竹(2013a)で考察した S+turn+out(+to+be+that)節構文の主語要素 S に“ it ”を選択する構文を It turns out that 節構文として取り上げた。It turns out that 節構文は主節動詞“turn”に単純現在形が頻用されるにもかかわらずその意味特性は解明されてこなかった。大竹(2013b)では，過去の判明を伝達する It turns out that 節構文の主節動詞 “ turn ” にしばしば単純現在形が使用されるメカニズムを意味的見地から分析し，次の知見が得られた。

(6) It turns out that 節構文は，先行文脈や話題中のことがらの実情や結末といった容易には知りがたい情報が，調査や研究などの一定の時間やざまざまな経緯を経て明らかになることを表現する。ものごとの真相や帰結の「判明」を表明する以上，その表明に先立って何らかの問題意識がもともと潜在することになる。結果として，判明を伝達する It turns out that 節構文の主節部に単純現在形が使用されるのは，問題意識の発生から判明に至るまでの「時間の隔たり」を必然的に含意するからである。

また，大竹(2014a)では，英語の談話で頻用されるつなぎ表現, “ that is ”や“ that is to say ”を That is 構文として取り上げ，大竹(2009)ではまったく，あるいは詳しく論ぜられなかった特性について実際の言語資料を観察しながら考察した。指示表現 that と繋辞 is から成り立ち，先行情報の換言機能を有する That is 構文に関して，次の諸相が解明された。

(7) That is 構文は聞き手にも容易にアクセス可能な数学的知識や辞書的知識に基づいて先行情報を同定する。
(8) That is 構文を介してわかりやすく換言された情報はしばしば後続する文脈の話題となる。
(9) ある情報が聞き手にとって直接的すぎる内容であるために不安や同様を与える可能性があるような場合に，客観的，具体的に言い直すことにより聞き手を安心，納得させる緩衝機能を That is 構文は有する。
(10) if 節，unless 節，when 節の前位に That is 構文が生ずるとき，先行情報の換言情報の提示を合図するのではなく，先行することがらや情報が成立する条件を但し書きとして導く機能を発揮する。
(11) if 節，unless 節，when 節の後位に That is 構文が生ずるとき，その条件内容が先行情報からは聞き手に推測できないような条件内容を合図するという特徴を示す
(12) That is 構文は口語において，話し手が適切な表現を心中で探したり，確信が持てない情報を提示することを合図する談話標識として活用される。

大竹(2014b)では，X 位置に指示表現を伴い、伝達するのに抵抗感やためらいがあることを断り告げる構文のひとつである I hate to say X 構文を取り上げ，その意味と機能を実証的に考察した。分析の結果，次の点が明らかになった。

(13) I hate to say X 構文の X 位置に現れる指示表現 it や this が指し示すことがらは，先行文脈中ではなく but や though などの接続表現を介してつながれる部分に生ずる。
(14) 伝達するのに抵抗感がある内容をそのまま伝えるのではなく，指示表現 it や this で指し示すのは，聞き手に唐突な印象や無神経でぶしつけな感じを回避しようとする話し手の配慮意識の表れである。具体的には，指示表現 it はそれが指し示す内容が，話し手の念頭で十分に認知処理されて情報としてすでに定まっていることを積極的に合図する特性をもつことから，伝達するのに抵抗感があり，発話に先立って心中に留め置いてきた内容を表明するという含みを表出する。また，指示表現 this はそれが指し示す内容が話し手には身近な情報であることを合図する特性をもつことから，聞き手には容易には知りがたい新事実を披瀝するという含意を伴う。I hate to say X 構文の X 位置に現れる指示表現 it や this は，言うのが憚られる内容を発話に先立って話し手が心中で受け止めていたことを聞き手に積極的に合図することから，聞き手に対する配慮意識が表現される。
(15) I hate to say X 構文の X 位置に指示表現 that が現れるとき，that は後続する発話内容ではなく，先行する発話内容を指示対象とする。また，but に導かれる部分は，言いにくい具体的内容を伝えるのではなく先行内容が真実であるという話し手の評価判断を伝えている。X 位置に that を伴う I hate to say X 構文の話し手は，事実を事実として包み隠さずに相手に伝えたうえで，その事実の伝達に抵抗感があるものの，動かしがたい事実である以上如何ともしがたいという意識の下で発話している。
(16) I hate to say X 構文がしばしば but, though，although といった接続表現と相関的に共起するのは，伝達内容に抵抗感があるという発話態度と，話し手の立場や状況を鑑みて率直に言わざるを得ないとい

う発話態度の切り替えを聞き手に合図するためである。話し手のそうした発話態度の転換表明は，適切な指示表現を選択して言いにくい内容を情報処理して伝達する方策と相俟って，聞き手への配慮意識や真摯にその内容を発話する態度を表出する。

(17) 伝達するのに抵抗感があることを断り告げる前置き表現は日本語にも存在する。ただし，英語とは異なり，日本語では「こんなこと」や「これ」などの指示表現のみならず，名詞化詞「の」や「こと」を選択する。

(ii) a. こんなこと言いにくい｛φ / の / ??こと｝ですが，先月その会社は倒産したんです。
b. ｛φ / これは｝言いにくい｛φ / の / こと / ことなの｝ですが，先月その会社は倒産したんです。

こうした日本語の言語現象と本研究で考察した英語の言語現象の普遍性と個別性の解明は今後の研究課題である。

平成 25 年度の研究成果は当初の目標を概ね達成することができた。

研究最終年度の平成 26 年度は，平成 24-25 年度に得られた成果を検証すると同時に，従来は個別的又は部分的に論ぜられてきた It is that 節構文と It turns out that 節構文の意味特性，発話条件，談話機能を統一的視座で比較対照することで，聞き手には容易には知りがたい情報が言語化され，談話に切り出されるメカニズムを明らかにした。話し手は聞き手と情報を円滑に交換するためにさまざまな工夫を施す。たとえば，事の真相や内情を伝えたり，新事実の判明を披瀝する場合，話し手は聞き手の解釈や持ち合わせている知識を想定しながら情報を言語化する。英語の談話で頻用される It is that 節構文と It turns out that 節構文は，そのような聞き手には容易には知りがたい情報を that 節内に表現する構文である。大竹(2015)（「知りがたい情報の同定と判明を披瀝する英語の構文：It is that 節構文と It turns out that 節構文の比較対照」田村敏広・西田光一・深田智（編）『言語研究の視座』東京：開拓社. 総頁数 469 頁（pp.172-187.））では，It is that 節構文と It turns out that 節構文の異同を統一的視座で検証し，次の考察結果が得られた。

(18) It is that 節構文と It turns out that 節構文は発話環境が異なる。It is that 節構文は発話の契機となる情報が先行文脈で言語的に与えられていない談話冒頭での発話は容認されない。それは，同構文が先行情報を話し手の知識と関連付けて同定し，解釈を与えるからである。一方，It turs out that 節構文は新聞の見出しや冒頭文でしばしば使用されるという重要な発話上の特徴を示す。物事の「判明」は問題意識のないところからは生じ得ない。事の内実や新事実の判明を伝える同構文は，判明対象の事柄が聞き手の目下の関心を集め，判明されるべきものとして意識中に存在していると話し手が想定すれば，発話の契機となる情報が先行文脈中に与えられていない環境であっても発話されるという特性がある。

(19) 聞き手には容易には知りがたい情報が伝達されるとき，予め想定される誤解が打ち消されたり，物事のうわべや表面が否定されることがある。解釈や実情を表現する It is that 節構文は，予想される聞き手の誤解や誤認の可能性が打ち消されてからしばしば発話される。一方，It turns out that 節構文は事の内実や新事実の判明を披瀝する。そのため，同構文に先行して，物事のうわべや表面の情報が否定される事例が観察される。

(20) 両構文はいずれも that 節内の情報を事実として伝える反面，その真実性には相違がある。It is that 節構文の that 節内にはその場逃れの虚偽情報が事実を装いとっさに示される場合がある。一方，It turns out that 構文は話し手の偽情報や立証しがたい情報ではなく，しかるべき検証を経た事実の判明を伝達する。そのため，同構文の前後で，調査などの検証作業に言及する文がしばしば発話される。

(21) 両構文が話し手自身の私的な事柄を披瀝する場合にも that 節内の命題内容の情報特性は異なる。It is that 節構文では話し手の現在の感情や評価判断といった，他者には客観的に把握しがたい私的内情が披瀝される。しかし，このような話し手自身の私的内実や個人的嗜好が判明したことを表す場合であっても，It turns out that 節構文は，自問や自省を通して自らの心中を検証した結果，事実として判明したという意識で発話される点に同構文の特徴がある。

(22) It turns out that 節構文はその判明したばかりの事柄の意外性がきわめて高いと判断される場合には，聞き手に情報を明かす Guess what?のような談話標識に導かれて談話に切り出されることがある。一方，It is that 節構文は事実判明を披瀝するのではなく事柄の内情を同定するため，聞き手に情報を明かす談話標識に導かれて発話されることはない。

(23) It turns out that 節構文が表現する「判明」は驚嘆の含意を伴うと指摘されることがある。しかしながら，同構文が表す新事実の判明は常に驚きの念を伴って伝達されるわけではなく，事実の判明が話し手の予測や想定可能な範囲内である場合もある。

(24) 両構文が派生する談話機能の一つに相手を安心させる機能がある。It is that 節構文は単なる思い付きを伝えるのではなく，話し手が先行情報を発話に先立って十分に認識処理したうえで解釈を断言する。このことから相手を安心させる談話機能が派生する。It turns out that 節構文もまた相手を安心させる談話機能を派生する。気掛かりな事柄を受けて同構文でその実体や経緯が明かされるとき，相手は事柄の内実を具体的に理解して不安から解放されるからである。

(25) 両構文と just との共起現象を考察した。It is that 節構文は相手の誤解を意識しつつ，それに代わる話し手の解釈や実情を表現する。裏を返せば，同構文には相手の解釈の誤りや知識の欠如を問題にする可能性がついてまわる。そうした含意を積極的に回避するため，同構文は対人関係を良好に保つ緩衝用法の just としばしば共起する。一方, just と共起する It turns out that 節構文は話題中の事柄に関する全ての事実の開示が求められる状況で，ある事実の判明以外に打ち明けるべきことはないことを積極的に表現する場合に発話されるという違いが確認される。

最終年度の研究成果は当初の目標を概ね達成することができた。

なお, 平成 27-30 年度科学研究費補助金(基盤研究（C)，研究代表者：大竹芳夫）課題番号 15K02592「日英語の文連結現象において指示表現と名詞節化形式が果たす役割に関する総合的研究」の新規交付が内定しており，本研究で見出された基本的知見と着想を，次年度以降の研究でさらに深化，発展させながら，成果を国内外に積極的に発信する予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①「文をつなぐ指示表現の出没と選択に関する意味論的・語用論的研究：I hate to say X 構文が指示表現 X でつなぐもの」
『言語の普遍性と個別性』 第 5 号. 査読無. pp.15-32. 2014 年. 大竹芳夫（単著）.
http://hdl.handle.net/10191/26967

②「指示表現と換言：That is 構文がつなぐ情報」
『新潟大学経済論集』 第 96 号. 査読無. pp.171-183. 2014年. 大竹芳夫(単著).
http://hdl.handle.net/10191/26713

③「主節部に単純現在形が現れる It turns out that 節構文に関する記述的研究」
『新潟大学言語文化研究』 第 18 号. 査読無. pp.13-26. 2013 年. 大竹芳夫（単著）.
http://hdl.handle.net/10191/23944

④「S + turn + out (+ to + be + that)節構文の主語要素の選択と出没に関する意味論的研究」
『言語の普遍性と個別性』 第 4 号. 査読無. pp.1-25. 2013 年. 大竹芳夫（単著）.
http://hdl.handle.net/10191/27091

〔学会発表〕（計１件）

①「「の（だ)」に対応する英語の構文の意味と機能」（招待講演）
大塚英語教育研究会.(2013 年 7 月 13 日, 於：筑波大学文京校舎） 大竹芳夫（単独）.

〔図書〕（計１件）

①「知りがたい情報の同定と判明を披瀝する英語の構文：It is that 節構文と It turns out that 節構文の比較対照」
田村敏広・西田光一・深田智（編）『言語研究の視座』東京：開拓社. 総頁数 469 頁（pp.172-187.）2015 年. 大竹芳夫（単著）.

〔その他〕（計６件）

①本研究と関連する研究成果還元講座：
平成 26 年度教員免許状更新講習会
講習名：「言語学から見た英語」, 講習題目「実践的コミュニケーション能力を育成する英文法指導の在り方」 （2014 年 8 月 23 日, 於：新潟大学）講師：大竹芳夫

②本研究と関連する研究成果還元講座：
平成 26 年度放送大学（文部科学省認可通信教育「英語が映し出す心と言葉の仕組み」）（2014 年 4 月 26, 27 日, 於：放送大学新潟学習センター）講師：大竹芳夫

③本研究と関連する研究成果還元講座：
平成 25 年度教員免許状更新講習会
講習名：「言語学から見た英語」, 講習題目「実践的コミュニケーション能力を育成する英文法指導の在り方」 （2013 年 8 月 12 日, 於：新潟大学）講師：大竹芳夫

④本研究と関連する研究成果還元講座：
平成 24 年度教員免許状更新講習会
講習名：「言語学から見た英語」, 講習題目「実践的コミュニケーション能力を育成する英文法指導の在り方」 （2012 年 8 月 9 日, 於：新潟大学）講師：大竹芳夫

⑤KAKEN: 科学研究費補助金データベース
http://kaken.nii.ac.jp/ja/r/60272126

⑥研究代表者所属研究機関ホームページ
http://researchers.adm.niigata-u.ac.jp/R/staff/?userId=100000139

６．研究組織

(1) 研究代表者
大竹　芳夫　(OTAKE　YOSHIO)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：60272126

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし